



TITLE:

文化現象の凝集作用(一)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

CITATION:

恒藤, 恭. 文化現象の凝集作用(一). 經濟論叢 1927, 25(2): 179-196

ISSUE DATE:

1927-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128571>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會

經濟叢論

第二號

第二十五卷

昭和二年八月一日發行

論 叢

營業稅の課稅標準

法學博士 神戶 正雄

文化現象の凝集作用

法學士 恒藤 恭

意味現實態

文學博士 米田庄太郎

國家の組織

法學士 作田 莊一

近世の港

文學博士 三浦 周行

說 苑

リカ
アド 勞賃論とサス マル
人口原則

經濟學士 森 耕二 郎

植民及び植民地の意義

經濟學士 長田 三 郎

雜 錄

フオードの勞賃論

經濟學士 星野周一 郎

一九二六年度の英國銀行界

經濟學士 道上 清治

國際經濟會議

法學士 沙見 三 郎

文化現象の凝集作用 (一)

恒 藤 恭

緒 言

本論叢第十八卷第二號所載の拙稿、『政治現象の本質』の中で、私は次の如き考へを述べた。

——『各種の文化現象を通じて、次のやうな事實が經驗的に觀取される。——同一の種別に屬する文化現象の一切は、論理的に觀て、その文化現象に特有なる本質的屬性を具備するのでなければ、恰もその特殊の種別に屬する文化現象として認識されることを得ない。かやうな論理的要求は如何なる經驗的事實によつても動かされるものではない。併しながら或る特殊の文化現象として成り立つ爲に要求される條件を満足に具備するところの個々の現象が、吾々の知覺し得る實在要素を支盤として經驗の世界の内面において事實的に發生する態様を觀察するときは、或る限られた範圍の現象においては、其れをして特定の種類の文化現象として成立し得させるところの論理的要素が、その把握を可能ならしめる實在要素との關聯において極めて明瞭に、極めて純粹

にあらはれる。之に反して、他の範圍の現象においては、さうした特別の事實が觀取されず、殊に其かなり廣い範圍にわたつて、現象を成り立たしめる實在要素の性狀の影響のために、その現象の論理的性狀の把握が著しく困難となつてゐることが觀取されるのである。かやうな普遍的事實を各種の文化現象にわたつて説明する事は、他の機會において試みたいと思ふのであるが——其れをば「文化現象の凝聚傾向」又は「文化現象の凝聚作用」とよぶ事とする*。

爾來、個人的事情のために、今日に至るまで右のやうな試みを實行することが出来なかつた。而して右の所説において問題とした事柄につき私は未だ満足なる理解を獲得するに至つてゐないけれど、現在考へて居る所を一應以下に論述し、以て右の所説における言明に對して不十分なながらもその責を果すことを期する次第である。

一 考察の出發點

經驗の對象たるものの物と事件、又は物象と事象とを總稱して、現象とよび、斯かる意味における現象を以て考察の對象とするものの科學を、經驗科學と呼ぶ事とする。***

經驗科學は分類の標準を異にするにより幾様にも分類し得られる筈であるが、學問的重要性を有する分類の仕方は比較的少數に歸する。その一つとして、經驗科學を自然科學と人文科學と

* 拙著「價值と文化現象」p. 184—185 參照
** 現象といふ語の斯かる用法は、經驗科學的の見地に於いて此語を用ひるものではない。現象といふ語の用法に比すれば、より廣き意義の對象をも現象と見做すものがある。また例へば現象學的の見地に於いて先驗的對象をも現象と見做すものがある。用法に比すれば、より狭き意義の對象を現象と見做すものである。

に分類する仕方がある。斯かる分類の仕方において、人文科學は、精神科學、文化科學、社會科學、目的科學、人事科學等の名稱によつて呼ばれる場合もある。^{*}これに照應して、自然科學の考察對象たる自然現象との對立において、人文科學の考察對象たる人文現象は、精神現象、文化現象、社會現象、目的現象、人事現象等の名稱をあたへられる。此れらの諸名稱の中でいづれが最も適當であるかと云ふことは、十分なる吟味を有する問題であるが、茲ではしばらく此問題には觸れることなく、『緒言』に引用した拙稿中の用語を繼續して、文化科學及び文化現象なる名稱を使用する事としたい。

なほ亦、自然科學と文化科學との區別は、如何なる意味において可能であるか、如何なる意味において根據有りとされるかと云ふ問題についても、茲では立ち入つて考究することを爲さず、只この問題に關する私の見解を約言すれば——文化科學は經驗的實在の世界を以て人類の努力による諸々の價値の實現、保存及び發展の地盤と視、斯かる見點から經驗的實在の世界の様相を認識することを目的とする。之に反して、自然科學は斯かる人類の努力との交渉をば關心の範圍の外に置きつゝ、經驗的實在の世界の様相を認識することを目的とする。それ故、文化現象は必ずや其裡に諸々の價値の實現、保存、發展の爲にする人類の努力又は活動の内容と形態とを直接又は間接に反映するものと考えられるに反して、自然現象は斯かる旨趣、斯かる色彩を示すものと

* 自然科學は、精神科學、文化科學、社會科學、目的科學、人事科學等の名稱によつて呼ばれる場合もある。これに照應して、自然科學の考察對象たる自然現象との對立において、人文科學の考察對象たる人文現象は、精神現象、文化現象、社會現象、目的現象、人事現象等の名稱をあたへられる。此れらの諸名稱の中でいづれが最も適當であるかと云ふことは、十分なる吟味を有する問題であるが、茲ではしばらく此問題には觸れることなく、『緒言』に引用した拙稿中の用語を繼續して、文化科學及び文化現象なる名稱を使用する事としたい。

は認められない。

諸々の文化科學によつて認識される對象の範圍をおしなべて文化の世界と名づけ、之を自然科學によつて認識される自然の世界に對立せしめ、更に、各個の文化科學の考察對象たる各種の文化の世界を特に文化領域と名づけるならば——學問の世界において特殊の文化科學の成立してゐる場合には、常に之に對應して、文化の世界の中に特殊の文化領域が存立する筈である。この立言の逆は必ずしも眞でなく、特殊の文化領域が現實に存立してゐながら、之に對應する特殊の文化科學の成立して居ない場合は有り得るけれど、しかも特殊の文化科學は常に特殊の文化領域との平行においてのみ成り立つものと言はねばならぬ。例へば、宗教學、言語學、經濟學等の文化科學の成立は、宗教的、言語的、經濟的等の文化領域の存立と相俟つが如くである。

各種の文化領域が互ひに他から區別されつゝ、獨立の領域として存在するのは、其中に包含される各種の文化現象がそれ／＼獨自の構造と性狀とを有する事に因るのであるが、しかも諸々の文化領域が相互の間に密接なる内面的關聯を有し、相合して統一的なる文化の世界を形成する所以は、諸種の文化現象が對象として具有する所の素材の共通性、又は諸種の文化領域が對象の世界として立脚する所の地盤の共通性に求められるのである。個々の文化科學の立場からしては、個々の文化領域は互ひに他に倚存することなく、獨立の存在を保つものと視られるけれど、各個の文

化科學の基礎、全體としての文化科學の基礎、又は文化科學一般の基礎を考察する學問の立場からは、諸々の文化領域は相合して一個の文化の世界を形成しつゝ、共同の實在的地盤に立脚するものと思惟される次第である。しかば、斯かる共同の地盤の上に、如何なる仕方で個々の文化領域は成立するのであるか？ 斯かる共通の素材からして、如何にして種々の文化現象は形成されるのであるか？ けれども、斯く問ふ場合には、個々の文化現象が相互に異なるものであり、他から區別され得るものである事が、前提されてゐる。この前提は如何にして可能とされるか？ 例へば、宗教現象の一群と藝術現象の一群とが相異なるものとして他から區別されるのは、諸々の宗教現象が宗教現象としては同一の本質を有し、藝術現象についても同様だからである。すなはち、吾々は宗教現象及び藝術現象の本質の何たるかを知つて居るからこそ、一群の現象を以て、或は宗教現象なりと判斷し、或は藝術現象なりと判斷し得る筈である。しかも、翻つて宗教現象又は藝術現象の本質の何たるかを明かにする爲には、宗教現象たる一個又は一群の現象、又は藝術現象たる一個又は一群の現象を捉へ來つて、其中に含有されてゐる宗教現象の本質又は藝術現象の本質に着眼するの途に出づる外は無い。而して其際、捉へ來つた一個又は一群の現象が、眞に宗教現象たり又は藝術現象たるのでなければ、その本質の檢出の目的を達し得ないことは明白な事理である。

此れらの二様の要求は互ひに他を前提するものであり、解く可からざる矛盾を成すかの如く思はれるけれど、其れは、論理的關聯と事實的關聯との交錯において現れる表見的矛盾であつて、眞實の矛盾たるものではない。

各種の文化現象の本質の認識は、歴史的社會的に或る種の文化現象として與へられて居る所のもの、内容の分析、批判から出發する。^{*}その結果、若しも其現象の本質について正當なる認識に到達したならば、斯かる認識の見地から最初の出發點を振り返つて見て、其處で或る一個又は一群の現象を暫定的にAなる文化現象なりとして捉へ來つたことが、言ひ換へると、其處でAの本質に關する明瞭且つ十分なる自覺無しに或る現象をAなりとして捉へ來つたことが、決定的に正當なる仕方であつたと、回顧的に、追認的に判斷される次第である。初めに、社會的歴史的にAなる文化現象として認められてゐる所のものを考察の對象として選び出すのは、事實的、暫定的意義における現象の範圍の限定である。そして斯かる事實的限定の當不當を論理的見地から批判する作業は、問題たる現象の本質を把握する作業と互ひに連繫して爲されなければならぬ。

或る種類の文化現象の本質の認識は、何が歴史的社會的にその種類の文化現象とされて居るかといふ事實の吟味を以て、第一の過程とすることを要する。言ひ換へると、文化現象の本質を問題とするに當つては、文化の世界が人類の歴史的社會的生活の所産であると云ふ根本の制約を十

* 前掲摘著 p. 176 以下參照

分に念頭に置かなければならぬ。それを無視して、全く思辨的に先天的に問題を考察すると云ふことは、意味を成さぬ。

次に、歴史的社會的にA B C等の文化現象とされてゐる所のものに着眼し、個々のA B C等の文化領域を通觀するとき、それらの文化領域の各者の内部において文化現象が一樣なる状態において與へられて居ない事實に當面する。文化現象の凝集作用の問題は、斯かる事實の認識に關聯して發生する。そして、文化現象の凝集作用の見點を把握することは、文化現象の本質の認識のための第二過程を成すものと、私は思惟する。以下の所説において、この點を明かならしめ度いと思ふ。

二 文化現象に關する常識的概念の重要性

文化現象の本質の認識に關し、前節において二つの條件を舉示したが、第二の條件は第一の條件の肯定からして導き出される所である。従つて問題の考察は、第一の條件が肯定される理由の吟味から出發しなければならぬ。

文化現象の本質を認識せむとするに當り、何故に歴史的社會的に承認されてゐる所のものを手がかりとする事を必要とするか？——此事たる、文化現象の一般的、根本的構造に基因する。

文化科學は、經驗科學の一種別である以上、一定の限度において自然科學と同一の諸制約に服する。たとへば、認識主觀と認識客觀としての經驗的對象との對立、認識作用による此對立の統一、斯かる作用による經驗的認識の成立と云ふ如き制約は、文化科學たるは自然科學たるを問はず、一般に經驗科學の成り立つ爲の根本的制約を成す。文化科學的認識は、斯かる根本的制約に加へて、其れに特有なる制約をもつ事により經驗科學の特殊の部門とし 存立する。

科學的認識において認識主觀たるのは、現實には個々の學者であるが、文化科學の場合には、認識對象の側に認識主觀としての學者と同一の精神的機能をも有する對象、即ち人間が現れるばかりでなく、後者の精神的機能が文化科學的對象の構成其者について重要な役割を勤める。自然科學の大部分においては、其對象は人間の活動を俟たずして自然的に形成されたものとして現れる。また或る種の自然科學において、對象の形成の上に人間の活動が影響を及ぼすと視られる場合にも、考察の興味は恰も其點には存せず、人間の活動も他の一切の自然的運動と同一の見地において考察される。然るに文化科學の場合には、認識主觀としての學者と同一の精神的機能をもつ所の人間が對象の世界に現れ、對象の世界の形成に直接の影響を與へるのであり、且つ正に斯かる作用を營む主體としての資格において認識主觀の興味を惹くのである。此事たる、一方においては、學者自身が、認識主觀としては文化的對象の世界に對立するものでありながら、人間と

しては文化的對象の世界の内面に自己の存在を託せざるを得ないことを意味する。他方においては、認識對象の側に現れて、其活動及び其活動の所産を客觀的に認識される所の人間其者は、立場を變へるならば認識主觀としての學者の立場に立ち能ふばかりでなく、或る意味において又は或る程度において、對象の世界其者の内面において學問的態度と同様なる又は類似の態度を執り得ることを意味する。茲では、此後の方面が主として吾々の興味を惹く。

謂はゆる常識の立場は、文化科學的對象に關しては、認識主觀としての學者の立場と認識對象としての人間の立場との交錯によつて成り立つ立場である。其れは、一面には、學者の立場と共通する方向を有つと同時に、他面には、實際生活における人間の立場、實行的立場其者をも内に含んでゐる。勿論、文化現象についてのみならず、自然現象についても亦常識は成り立つ。しかしながら自然現象の場合には、常識は文化現象の場合における如き二様の立場の交錯性を示さない。換言すれば、自然現象についての常識は、根本において學問的認識と一致せる立場に立つものであり、常に認識主觀の側に立たむとする。唯、常識の立場は、この場合において、學問的段階にまで昇つてゐないだけの差違を存するに過ぎぬ^{*}。之に反して、文化現象についての常識は、認識主觀の立場において獲得される所の文化現象に關する理解を示すと共に、文化現象其者の形成、發展に影響を及ぼすものであり、従つて文化現象の形態及び性狀の裡に常識の反射的内容が

^{*} 自然現象に關すると文化現象に關するとを問はず、一般に現象に關する常識が、經驗科學的概念を吸收し、又は後者の影響の下に概念構成を行ふといふ事實は、茲ではしばらく關心の外に置く。

観取される場合を存するのである。斯くて、文化現象に關しては、常識は自然現象の場合よりは一層複雑なる地位に立ち、科學的認識との關係において一層重要な意義を有する。

自然科學的認識と雖も自然現象に關する常識的理解すなはち常識的概念を考慮の中に入れる。

たゞ此場合には、常識的概念その者が自然現象の中に構成分子として織り込まれて居るといふ様な考へ方は、意味を成さぬ。自然現象に關する常識的概念の構成の上に、實際生活において人間が自然的事物と交渉し接觸することによつて受ける印象が重大なる意義をもつ事は、言ふ迄もないけれど、斯くして構成された常識的概念が爾後自然現象その者の形成に影響を及ぼすとは考へられぬ。しかるに實際生活において人間が文化的事物と交渉し接觸するとき、人間は其儘文化の世界の中に立ち、自分みづから文化現象の一つとして存在するのである。そして人間が文化的事物につき常識的概念を構成すること自體も亦、やはり一の文化現象であり、従つて一定の常識的概念の構成は、その構成されなかつた場合とは異なる形態を有する所の文化現象の構成を促す傾向をもつと言はざるを得ない。文化科學的認識とても歴史的事實として見られる限りにおいては、文化現象の一種たり、文化の世界の一構成要素たることにおいて、文化的常識と何等異なる所はない。唯、文化科學的認識が學問的認識たり得る爲に充す可き條件の一つとして、個々の現實的認識主觀が一定の時代の一定の社會において有する實際生活上の特殊的地位に基いて、考察

さる可き對象と彼自身との間に生ずる所の一切の特殊的個人的關係を能ふ限り捨象することに因り、普遍妥當的概念を構成することが、要求されるのである。そして現實の文化科學的認識が、やうな要請を充す限りにおいては、文化科學的概念は常識的概念に比して優れたる認識價值を具へるものと考へられ、文化科學の立場と常識の立場とが截然と區別され得るのである。斯くの如く、實際的興味を中心として形成される點においては、自然現象に關する常識的概念も文化現象に關する常識的概念も、ひとしく科學的加工方法に依つて精練されることを要するが、自然現象に關する常識的概念はそれ自身文化現象であつて自然現象では無く、従つて自然科學的認識の對象としての意義をもたぬに反して、文化現象に關する常識的概念は其れ自身文化現象であり、従つて其れみづから文化科學的認識の對象たり能ふと同時に、例へば經濟現象又は教育現象に關する常識的概念は、經濟現象其者又は教育現象其者の對象的形成、對象的發展に對し決定的因素の一たる意義を有するのである。

文化現象の本質的認識の上に文化現象についての社會的歴史の考へ方を手がかりとす可きであるとの要求は、右の如き文化現象と之に關する常識との關聯によつて基礎づけられる。Aなる文化現象に關するものなる社會的歴史的思想は、第一には、Aの構造及び性狀により何等かの意味において制約されて居るものと推測され得る。けれどしAが一定の期間一定の社會において歴史的社

會的事實として存立し發展し來つた場合に、Aに關する常識は、Aが現に示すところの構造及び性狀に對し、且つAが後者を具有する現在の狀態にまで發展し來つた事に對し、何等かの程度において内面的對象的關聯を有し來つたものであるとの推測を立てることが出来る。更に現象の構成の根柢に遡つて考へるときは、一般に文化現象は諸々の價値の實現、保存、發展のためにする人類の努力との關係において實在の世界が觀られる場合に吾々の意識に上り來る現象である以上、文化現象の形成は必然に人類の努力によつて制約されるものであり、従つて文化現象の形成其者についての人類の意識によつて制約されざるを得ない。しかるに、常識はその一面において實際生活における人類の意識の内容を包容するものである。だから、或る文化現象に關して歴史的社會的に與へられてゐる常識的概念は、何等かの意味において其文化現象の本質を把握する爲の手がかりを其裡に藏して居るであらうとの豫想が、一般的に妥當とされ能ふわけである。もとより此豫想が如何なる程度において眞に適中してゐるか云ふ事は、個々の場合における批判的考察に訴へて判定される外はない。

三 現象の内容と現象の本質

現象の本質なる概念が意義ありとされる場合には、現象の概念と現象の本質の概念とは異なる

概念を意味するのでなければならぬ。若しも現象が其儘現象の本質たるものであるならば、特に現象の本質なる概念を定立することは、學問的には無用の仕業たるであらう。即ち現象の本質の概念を構成することは、現象において本質的なものと非本質的なものとが區別され能ふと云ふ前提に基いてのみ其意義を認められる。しからば現象において何に關して本質的なものと非本質的なものとが區別され能ふかと云ふに、其れは何等か現象にとつて外在的な所のものに關してではなくて、現象の包容する所のもの、即ち現象の内容についてでなければならぬ。例へば、あらゆる現象は時間の中に在ることを以てその本質とするが、時間その者は現象について本質的なものではない。一方には、時間の本質は斯くの如く現象の成立のための制約たることに存するのであり、他方には、時間の中に在ることが現象の本質に屬するのである。しかも個々の現象が時間の中に成り立つのは、時間の中の一定の位置においてであるが、例へばAなる現象がAなる現象として成り立つ所以は、其れが時間の中となる特定の位置を占めることに存するのではない。むしろAなる現象は其れをしてAなる現象たらしめる所の内容を具有することによつてのみ時間の中となる位置に在り能ふのである。また例へば、人間の定立する何等かの目的に役立つ性質をもつと云ふことは、財なる現象の本質に屬するのであるが、人間の定立する目的その者は財なる現象の本質に屬せず、且つ人間の定立する目的に對する依存關係その者も亦財なる

現象の本質に屬せず、人間の定立する目的に役立つと云ふ物の性質が始めて財なる現象の本質の構成要素たるのである。

かやうに、現象において本質的なものは現象の内容について求め得られることが推知し得られるのであるが、この事たる、現象の本質は現象をして現象として成り立たしめる所の實在的根據を保持するものたることに基因する。Aなる現象の本質は、必ずや其れをしてAなる現象として成り立たしめる爲に必要にして十分なる根據を成すものでなければならぬ。斯かる根據を與へる所の本質との關係において、Aなる現象はAなる現象として必然に具有す可き内容を現實に具有するや否やを鑑別され能ふのである。換言すれば、Aなる現象が眞實に成立してゐるとき、其れをして斯く成立せしめるところの根據は、Aの内容其者であるとは言ひ得ないけれど、Aはその内容を通してのみ斯かる根據による支持を受け能ふのである。

現象の世界にあたへられる諸々の現象は、本質的な内容のみを具有しつゝ成立することを得ず、恒に本質的な内容をも具有しつゝ成立する。何故に斯かる事態が現象の世界において存立するかと云ふ問題を提起することが意義ありや否やは別論として、經驗は斯かる事態が現象の世界と共に恒に與へられてゐることを示す。例へば、弟よりも年長であることは兄の本質に屬するけれど、善良なる兄であることは兄の本質に屬するとは言ひ得ない。弟たる個人乙との關係

において兄たる個人甲は、兄としての本質に屬する規定以外の諸々の規定の下に立ちつゝ、乙の兄として人間の世界に存在する。そして甲が乙に對して善良なる兄であること又はあらざることは、兄として甲の具有すべき本質的屬性ではないけれど、甲が乙の兄たる所以のものと毫も矛盾するものではない。之に反して、甲が女性であることは、甲が乙の兄たる所以のものと矛盾し、従つて甲は斯かる屬性を具有しつゝ現實に存在することを得ない。即ち乙の兄たる資格において甲は兄として具有す可き本質的屬性と矛盾するところの如何なる屬性をも具有し能はぬ。さりとて、甲は乙の兄として具有す可き本質的屬性と矛盾しないところの如何なる屬性をでも具有し能ふとは云ひ得ない。甲が乙の兄であると云ふ事柄の見地に立つて観るとき、乙の兄として具有す可き本質的屬性は甲の具有する屬性の最小限であるが、斯かる制約に矛盾しない限り如何なる範圍において如何なる屬性を甲が具有するかは、甲に關して經驗的觀察の示す所にしたがつて判定する外はない。例へば、甲が日本人である事實が知られたとすれば、問題たる屬性の可能的範圍は一層局限されるであらう。斯かる新たな事柄に對應する新しき見地が次々に採擇されることによつて、甲の具有する屬性の可能的範圍は漸次に縮小され、次第にその現實的範圍に接近する傾向を示すであらう。

一般に吾々にとつて知られ得る對象は、何等かの規定を有するもの又は一定の仕方で規定され

得るものである、而して對象の規定は意味に依つてのみ可能である。即ち對象とは意味によつて規定されたもの又は規定され得るものを謂ふ。而して或る對象の規定として考へられた意味の統一的複合はその對象の内容を成す。前に示した約束に従へば、現象は經驗的認識に與へられる對象、すなはち經驗的對象である。或る對象の内容が官能を通して知覺され得る事實的意味成分を基盤として成り立つ場合には、その對象は經驗的對象、すなはち現象たる性質をみとめられる。

現象の内容は、經驗的事實を基盤として存立する統一的意味に他ならず、現象において本質的内容と非本質的内容とが區別され得ると云つても、此れらの二様の成分は雜然として一つの容器の中に包括されつゝ共存すると云つた様なものではなく、二者の間には互ひに内面的なる關聯を存し、本質的内容は非本質的内容との結合においてのみ或る現象の内容として現實の世界に與へられ得るし、非本質的内容は本質的内容に附隨することにおいてのみ恰もその現象の特殊性の成立に參加し得るのである。

現象の内容は現象の規定の綜合されたものであり、従つて亦現象の自同性の成り立つ條件を包藏する。而して或る現象は其れをして成り立たしめる根據たる本質によつてのみ自同的存在を保有する。^{*}斯くて現象の本質的内容は現象の自同性の存立の基礎たるに反し、非本質的内容は斯かる意義を有するものではない。個々の現象が時間的又は空間的位置の變化、他の現象との相互關

* この事柄は、現象がその自同性を保有しながら其本質の一部分を變じ得るや否やの問題を、一義的に決定するものではない。

係における變化にも拘らず、自同的なものとして存立する事柄の基礎を成すところの個々の現象の本質的内容は、その非本質的内容に對して一般對特殊の關係に立つ。而して如何なる二個の現象を捉へ來るにもせよ、二者が同一の現象でない以上、各者は何等かそれをして他者から區別され得しめるどころの非共通的なもの、特殊的なものを具有して居なければならぬ。これらの二者をさまざまの状態又は環境の下に比較する時、それらの場合を通じて常に二者の區別の規準を成すものは、各者に特有なる本質でしかあり得ない。他面において、如何なる二個の現象に着眼するにもせよ、二者が互ひに全く無關係なることはあり得ない。何となれば、二者は共に現象たることにおいて、現象が現象として具有すべき本質的内容を必然に提示する筈であるから。

そして相等、類似、相違、其他の諸關係が二者の間に觀取されるのは、斯かる普遍的なるもの、媒介的機能によつてのみ可能である。斯くて、現象の世界に存在するところの如何なる現象も、それをして現象として成立し得させる一般化的原理としての現象一般の本質と、それをして個別の又は特殊の現象として成立し得させる個別化的又は特殊化的原理としての現象の個別的又は特殊の本質に想到せしめるのである。^{*} しかも現象成立の一般化的原理としての現象一般の本質と、その特殊化的又は個別化的原理としての特殊の又は個別的現象の本質とは、相互の間に内面的、必然的關聯を有する故にこそ、相互に他に對して一般的たり特殊たり又は個別的たることを得る。別言すれば、現象の一般的、特殊の及び個別の本質は相合して一の統一的、體系的全體を形

* 茲にいはいゆる現象成立の一般化的原理と特殊化的原理との對立は、論理的見地からみて現象の内容における一般的者と特殊の者との對立と考へられるものものと一致するものではない。

成する契機を包藏するものであり、斯かる法則的意味關聯の見點に立つときは、現象の一般的本質も、特殊的又は個別の本質も、同一の普遍的本質の發展の諸形相として理會さるべく、現象成立の一般化的原理も、其特殊的又は個別化的原理も、同一の普遍的原理の作用の行はれる諸態様として理會さるべきである。

現象において本質的内容と非本質的内容とを識別することは、根本においては斯かる現象の本質の法則的體系の洞察によつてのみ可能である。而して、若しも個々の現象の具有する一切の内容的成分が斯かる體系の見地から剩す所なく理解され能ふならば、現象において本質的内容しか認識され能はぬであらう。斯かる理解が原理的に不可能であるか、又は人間の認識能力にとつてのみ不可能であるかは、別問題として、吾々は現實には斯かる理解の境地から距たること甚しく遠い位置に置かれてゐる。かやうな事情の存する理由は、一方には本質的法則の認識の困難にあるし、他方には現象の吾々に與へられる條件に基く。試みに後者の中の主要なるものの一をあげると、現象は種々の側面においてその性狀を提示し、吾々はその各個の側面においてのみ現象の性狀を正確に把握することを得る。而して一の側面から観て、現象の本質的内容と認められる意味は、他の側面から観て、必ずしも現象の本質的内容として看取されるとは限らぬ。しかも現象の示す諸側面の全體を同時に通觀する見點に立つことにより、現象の全内容を一義的に本質的内容として認識することは、吾々の認識能力の到底企及し能はざる所である。(未完)